シーズ発掘
・
ニーズ把握

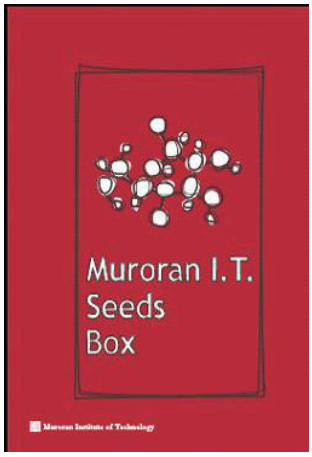
大学等のシーズ発掘

継続的なシーズ発掘とその活用

ｷｰﾜｰﾄﾞ:シーズ創出・共同研究・受託研究・シーズ集

本事例の関係者

室蘭工業大学
　地域共同研究開発
　センター
室蘭市テクノセンター
公設試
産学官連携支援団体
文部科学省産学官連携
　コーディネーター



室蘭工業大学シーズ集

シーズ発掘試験の応募、採択状況

	応募数	採択数
H18	68	7
H18	81	11
H19	64	11
H20	72	14

創出・顕在化、高度化サイクルの構築

【要約】
大学の３大ミッションが教育・研究・社会貢献である。この社会貢献を活動の重点とするコーディネーターは、大学に軸足を置き、研究成果である研究・技術シーズを産業界へ移転することにより目標を果たしている。この活動を継続するためには、活動の根源となる研究シーズを掘起し、その創生・高度化を推進する大学の産学連携体制を支援していかなければならない。
　この支援の具体例として、コーディネーターは日常から学内部署に対して社会貢献事業の推進と意識向上を心がけ、シーズの創出と高度化を進めてきた。その結果、共同研究の成約やプロジェクト事業の受託による外部資金獲得に顕著な成果が現れてきており、今後も一層の推進を図っていく。

【きっかけ】
本学は北海道有数の製造業の集積地帯にあり、製造業との相互扶助により共存してきた典型的な地方の単科大学である。企業からは、今後の地域のイノベーション創出のための共同研究に期待がかけられており、企業のニーズにタイムリーに応えていくためには、大学の研究シーズの探索とマッチングが不可欠である。
　そこで、コーディネーターが中心になり、最新の研究シーズの把握、および的確な情報発信を行うために、技術相談や共同研究・受託研究の推進、および研究成果の技術移転を推進する仕組みを構築し実行に移すこととした。

【段取り・ﾌﾟﾛｾｽ】
●取り組むべき課題と対応策
①中小企業の製品、または製造技術の改善に関する技術相談の多くは、研究シーズを活用するまでもなく、大学および公設試の支援を得て対応する。
②新分野（新製品開発、新事業化）への進出には、進出の目標と、進出により得るべきプロダクツを明確に設定し、共同研究または受託研究を開始する。
　研究成果を得るための着実なステップは、以下の研究過程における教員の研究シーズの追及と、コーディネーターの継続的支援のサイクルを回すことである。
（１）シーズの掘起しと顕在化
（２）シーズ情報の弛まぬ発信
（３）効率的シーズ・ニーズのマッチングとシーズ育成環境の改善
（４）研究環境の整備

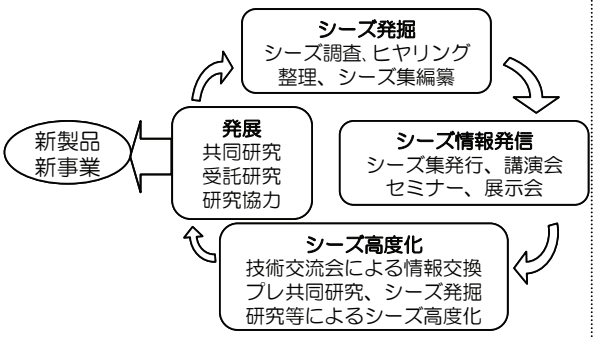


図　シーズ発掘と創出の高度化サイクル

【成果・結果や活動後の変化】
（１）学内のシーズ発掘、顕在化シーズのヒヤリング、シーズ集の編纂の過程でコーディネーターと教員の関係強化が図れた。
（２）産学官連携支援団体との連携による情報交換が活性化された。
（３）シーズ発掘試験、共同研究、受託研究、およびプロジェクト事業などの外部資金獲得に成果があった。

シーズ発掘・ニーズ把握

成功の事例

地域企業に密着した共同研究の立上げ支援

●研究シーズの棚卸と情報発信
シーズの発掘と顕在化のため、教員と直接面談し、活用する側の視点で編纂することによってシーズ集の内容と件数の充実を図った。

表　研究シーズ集発行件数の推移

年度	H18	H19	H20
発行総数	49	68	90

●地域企業の要望に密着したシーズ・ニーズマッチング活動の充実
技術相談による問題解決型の対応、共同研究による製造技術の改善および新製品事業化のための検討など、研究開発の推進にシーズの活用が有効に機能している。また企業訪問やシーズ集を活用した技術交流会でニーズの的確な把握、動向分析を行い、新たに研究協力アイテムの創出や共同研究の立上げを行うことができた。

●プレ共同研究によるシーズの高度化
技術相談の段階で未だ萌芽の段階にあるテーマを研究協力会の資金を活用し１年間の予備研究を行う制度を運用してシーズの高度化を図った。審査会で工業化等の発展性が検証された時点で企業との共同研究に進む事例を３件選定した。

●シーズ発掘試験応募と応募作業における内容の充実
応募過程で教員との信頼関係が醸成でき、次年度の応募に繋がった。

プレ共同研究審査会

失敗の事例

具体化までの道程の険しさを実感した

●新製品開発への進展が少ない
シーズ情報の発信、あるいは技術相談などによる直接対応などを積極的に行っているが、明確な成果として新規の製品化など技術移転が具体化するケースはまだ少ない。今後ともコーディネート活動の十分で弛まぬフォローが不可欠である。

●シーズ創出、高度化のためのコーディネート活動が必要
シーズの充実、高度化のために産業界のニーズ把握や、情報交換の機会の創出に努めている。しかし、具体的で目標を持ったシーズ創出はまだ多くはない。
　的確な情報収集と研究者との密接なコミュニケーションによるシーズの高度化に向けて更なる活動が必要である。

●社会貢献に対する意識改革を更に進める
教員のマインドの醸成が不可欠である。そのために、コーディネーターは教員との面談の機会を増やし、信頼関係を築き深めて行くことが大切である。

成功と失敗の分かれ道

大学の研究シーズを、広い分野の関係者との信頼関係醸成のツールとして利用できれば一石二鳥の成果となる。

産学官連携の新たな展開に向けた提言

弛まぬシーズ創出で活力を維持して行きたい

●シーズの創出・高度化の環境づくり
産学官連携による大学の社会貢献の根源は大学の「知」である研究シーズである。従って、研究者とコーディネーターが協力、連携して継続的にシーズの創出・高度化の環境づくりを進めて行くことが肝要である。このために、学内の社会貢献活動に対する認識を高め、幅広い産学官連携活動に理解と協力が得られるように、常日頃から関係者とのコミュニケーションを深めて行くことが必要である。

●複合・融合型研究システム
大学の研究成果に基づく社会貢献には広域的で効率的、かつ前向きな活動を可能にする環境つくりが必要である。そのためにはそれぞれの教員支援だけでなく、グループ的な活動や、研究対象を共通目標とする横断的研究体制などの新たな研究システムづくりを支援していく。このような研究システムに地域企業をむかえ、創出したシーズの技術移転等を進めて地域産業界の活性化に挑戦して行く。

☆ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰの一言

コーディーターは産業界との信頼関係を構築することが必須である。その信頼関係を基にして、共同研究等を成約させ、技術移転を図ることが可能となる。

本件に関する連絡先：crd@mmm.muroran-it.ac.jp